

五十嵐喜廣の事業実践の発展と展開：その生涯を年表よりまとめて

著者	佐藤 昭洋
雑誌名	道北福祉
号	1
ページ	31-37
発行年	2010-03-17
出版者	道北福祉研究会
論文ID (NAID)	40019000000
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001645/



五十嵐喜廣の事業実践の発展と展開

—その生涯を年表よりまとめて—

佐藤 昭洋

序章. 問題の所在と本研究の概要

問題の所在

五十嵐喜廣（いがらし・よしひろ）[1872-1944]は、1872（明治5）年山形県湯野浜（現鶴岡市）に生まれ、明治・大正・昭和（戦前）の時代に生きた人物である。

では、なぜ本研究において五十嵐喜廣を対象とするのか。その理由としては、以下の二つが挙げられる。1895（明治28）年創設から114年続いている日本児童育成園（岐阜県）、1929（昭和4）年創設から80年を迎えた七窪^{ななくぼ}思恩園（山形県）の二つの児童養護施設を創設した人物こそが五十嵐喜廣であった。そこで、なぜ戦前・戦中・戦後と長年このような事業の継続を可能にさせてきたのか。そのように考えたとき、その原点ともいえる創設者五十嵐喜廣に興味を持った。もう一つの理由は、この問題を取り組むに至った内的動機として、五十嵐喜廣と筆者が同郷であることが挙げられる。同郷というのは、山形県庄内地方という場所で生まれ育ったということである。そして、その土地の気候や自然を同様に経験しているという共通性がある。したがって、郷土の先人としての五十嵐喜廣を研究することは自身の強みになると考える。

元来、社会福祉における歴史研究がなぜ必要となるのか。特に、本研究は人物の歴史を辿ることを対象とするため、人物史研究の意義とは何であろうか。社会福祉の歴史研究に関して、金子（2007）は、「「学」としての社会福祉を探究する場合、理論研究がその中核となることに異論はないであろう。理論研究と歴史研究の関係をみると、理論による意味づけを離れて史実は存在しないが、逆に歴史的事実を抜きにして理論を構築することは不可能である。このように理論研究と歴史研究は相互に依存し合っている。・・・」²とある。このように、社会福祉の歴史研究は、歴史的事実を基に理論を構築するための基盤、さらには社会福祉の学問探究への基盤の一つとして成立するといえる。

人物史研究の意義に関して、さらに金子（2007）は、「日本の社会福祉史の研究者は、政治史や経済史に偏っていて、社会福祉の先駆者たちの歴史研究を十分に行ってきたとは必ずしもいえない。」³としている。また、田代・菊池（1989）によると、「従来の歴史は、とかく中央の一部有名なエリートをつねに登場させ、民衆をいつも中央の有力者の方を向かせることに終始していたことを強く反省させられる。

² 金子光一（2007）『社会福祉のあゆみ』『はしがき』pp. i ~ ii を参照。

³ 金子光一（2007）『社会福祉のあゆみ』p.3 を参照。

地方の地域で、名もなく、目だたなく、社会福祉実践を日夜コツコツと支え築いてきた人物がいかに多くいたことか、こうした従来歴史にあまり登場して来なかった草の根福祉の人物を掘り起こし、その人がいかに日本の社会事業・社会福祉の基礎を築いてきたか、その極めて重い実践遺産を継承できればと考えている。」⁴とある。したがって、より多くの社会福祉事業実践者達の軌跡にもスポットライトを当てることによって、現代の社会福祉に通ずるものを発掘する必要があるのではないか。そして、『社会福祉人物史（上）』には、本研究の対象である五十嵐喜廣もその人物の一人として紹介している。よって、五十嵐喜廣はその人物として適当するのではないか。

五十嵐喜廣の人物像を捉えるためには、1895（明治28）年に岐阜県で孤児救済事業を開始するまで、五十嵐の背景を理解する必要がある。その主な背景とは、幼少期における両親の死と、新潟県北越学館でのキリスト教への入信である。

五十嵐喜廣は、父与右衛門（ようえもん）と母霜（しも）の間に生まれた。父与右衛門は、1873（明治6）年、五十嵐が2歳の時に逝去した。そして、その4年後の1877（明治10）年、五十嵐が6歳の時に永眠する。五十嵐は立て続けに自分の父母を失うことになる。さらに、キリスト教信者としての五十嵐喜廣もまた、彼の生涯を辿るにあたって欠かすことのできない背景である。五十嵐は、新潟北越学館の校長松村介石の著書を読んで感銘を受けた。1889（明治22）年に同館へ入学後、成瀬仁蔵（日本女子大創立者）や内村鑑三らの教えを受けた。そして、松村介石とは後に生涯を通じての師弟関係としてその人間関係を築くことになる。北越学館卒業後の彼は、郷里に帰り家族をキリスト教に導こうとしたが、逆に猛烈な反対をうけ、家族にキリスト教を受け入れられなかった。その後、五十嵐は一度上京し、キリスト教伝道に従事するため岐阜県を目指すことになる。

本論文の概要と研究の方法

本論文は、五十嵐喜廣の生涯を年表における解釈の正確性の確認、及び解釈の違いの整理という視点から考察することを目的としている。

本研究の研究方法としては、まず、年表の解釈において、6つの文献及び資料を選定した。選定した文献や資料にはそれぞれ年表が記されているので、各年表を並列させ、解釈の比較を行った。そうして整理した年表の解釈の中には、解釈の違いが存在していることも調査中に発見した。そこで、一次資料として『創立90周年を記念して―「濃飛育児院(明治34年)の複製―』にある機関紙『濃飛育児院』から、選択した年代の年表の解釈を分析し、解釈の正確性の確認及び解釈の違いの整理を行う。年表解釈の基準となる文献としては、『孤児の父 五十嵐喜広の生涯』（1981、不破義信）を設定した。なぜなら、五十嵐喜廣の出生から逝去までの一連の流れを取り上げているところが他の文献と違い、五十嵐の全体像がよりわかりやすいからである。

以上の視点を持って、年表の解釈をまとめることとする。

⁴ 田代国次郎・菊池正治（1989）『社会福祉人物史（上）』「はしがき」を参照。

本章．五十嵐喜廣の生涯 一年表研究における一考察から一

第1節．五十嵐喜廣の出生年月日

1872（明治5）年（当時、五十嵐喜廣0歳にあたる。）

五月二十日、五十嵐喜広、山形県西田川郡加茂町大字湯野浜で同与右衛門と霜の四男として生れる。

思恩会ホームページによると、1872（明治5）年「5/21 湯野浜温泉恵比寿屋の三男として出生 幼名＝岩太郎」と表記している。

「岐阜県における社会事業の歴史—岐阜県における最古育児施設飛騨育児院と創立者五十嵐喜広」（1975、浅倉恵一）では、明治5年「五十嵐喜広山形県湯野浜に生れる」と表記している。

『社会事業の先覚者 五十嵐喜廣翁』（1984、社会福祉法人思恩会）では、昭和十九（一九四四）年「五月二十日、山形県湯野浜温泉五十嵐與右衛門（幼名岩五郎）、母霜の三男として出生、岩太郎と命名。」と表記している。（しかし、p.18には「四男」と表記している。）

上記の文献の解釈の違いを整理すると、五十嵐喜廣の誕生日は5月20日か、5月21日かである。

一次資料として適当とは言えないが、五十嵐の出生年月日について、若干の考察ができる資料が『五十嵐喜廣の生涯』である。同文献の「第一部 五十嵐喜広の出生から濃飛育児院の誕生まで」の「第一節 五十嵐喜廣の生立」では、「明治五年五月二十日に山形県、西田川郡、加茂町、湯の浜に一人の赤ん坊が生れた。」⁵と述べている。続く「第三節 彼の家系」では、「喜広即ち幼名岩太郎は、四代与右衛門の四男として生れた。同胞は何れも男子で彼は末子である。」⁶と述べている。従って、五十嵐喜廣は、1872（明治5）年5月20日、五十嵐家の四男として出生したことが考察できる。

第2節．日本児童育成園（飛騨育児院）の創設年と創設背景

1895（明治28）年（当時、五十嵐喜廣23歳にあたる。）

四月五日、飛騨船津町の路傍で富山県生れの幼児一名を拾う。

五月六日、船津町大火七八〇戸焼失

五月二十日、古川町で飛騨育児院発足するも九月になり全く経営難に陥る。

思恩会ホームページによると、1895（明治28）年「岐阜県古川町の素封家本田六三郎氏より家屋を無償貸与、飛騨育児院を創立、7名の孤児を収容」と表記している。

『社会事業界の偉才 五十嵐喜廣翁—小傳—』（1956、思恩会）では、明治26年の欄に、「五月、岐阜県飛騨国古川町飛田育児院創立、明治廿九年五月濃美育児

⁵不破義信（1981）『孤児の父 五十嵐喜広の生涯』、共和印刷株式会社 p.2を参照。

⁶不破義信（1981）『孤児の父 五十嵐喜広の生涯』、共和印刷株式会社 p.4を参照。

院に改称、明治卅九年十月日本育児院に改称。」とある。

「岐阜県における社会事業の歴史—岐阜県における最古育児施設飛騨育児院と創立者五十嵐喜広」（1975、浅倉恵一）では、明治28年5月「岐阜県古川町に「飛騨育児院」創立」と表記している。

『社会事業の先覚者 五十嵐喜広翁』（1984、社会福祉法人思恩会）では、明治二八（一八九五）年「四月五日、飛騨船津町の路傍にて富山県生まれの幼児一名を拾う。」、「五月二十日、岐阜県古川町の素封家本田六三郎氏より家屋を無料貸与され、飛騨育児院を創立して、七名の孤児を収容する。」と表記している。

『み恵みに生かされて 創立110年の歩み』（2005、道下淳）では、明治28年5月20日「岐阜県飛騨市古川町に五十嵐喜広が飛騨育児院を創設、院長に。」と表記している。

『創立90周年を記念して—「濃飛育児院(明治34年)の複製—』の『濃飛育児院』の内容に、創設年を証明する一文が記されている。「第一章 濃飛育児院の發端」には、「……身^みの微力^{びりよく}も不肖^{ふせう}をも顧^{かへり}みず敢^{あへ}て大膽^{だいたん}にも道路^{たうろ}に彷徨^{さまよ}いて居^をる乞兒^{こつじ}を拾^{ひろ}ひ上げましたのが此^この事業^{じげふ}の濫觴^{はじまり}で全志^{どうし}と相圖^{あいはか}り飛騨^ひ育児院^{だいくじ}と言^いふ者^{もの}を世上^{せぜう}に發表^{はつぱう}したのは實^{じつ}に明治^{めいし}廿八年^{ねん}の春^{はる}五月^{がつ}の廿日^{はつか}で御座^{ござ}りました處^{ところ}は、……」⁷とある。このことから解釈するに、飛騨育児院の創設を世に發表したのは、1895（明治28）年5月20日であることが証明される。

日本児童育成園という名称になったのは、昭和の時代に入ってからである。明治28年の創設当時は、飛騨育児院という名称であった。そして、その一年後に濃飛育児院と名称を変えたために、機関紙の名称が『濃飛育児院』になっている。

第3節．七窪思恩園（日本育児院七窪分院）創設年と創設背景

1929（昭和4）年（当時、五十嵐喜広 57 歳にあたる。）

五月二十日、鶴岡市七窪にシオン園開設。

同日 育児院創立三十五周年記念会を講堂で挙

思恩会ホームページによると、1929（昭和4）年「七窪に分院創設、昭和8年「七窪思恩園」として独立（開設後10年間電線なくランプ生活）」と表記している。

『社会事業界の偉才 五十嵐喜広翁—小傳—』（1956、思恩会）では、明治卅一年五月の欄に「東京、明治四十年丹波国舟井郡、明治四十三年北海道十勝国、明治四十四年甲府市、大正二年朝鮮全羅南道光州、大正十二年米国カルフォルニヤ州「モンタラ」、昭和四年山形県西田川郡西郷村大字下川に、同五年台湾に各々分院を設立す。」と表記している。

「岐阜県における社会事業の歴史—岐阜県における最古育児施設飛騨育児院と創立者五十嵐喜広」（1975、浅倉恵一）では、5月「山形支部の設立（山形県西田川郡西郷村七窪に分院を設立し、同年8月に独立し「七窪思恩園」と改称し、園長兼務となる」と表記している。

⁷ 『創立90周年を記念して—「濃飛育児院(明治34年)の複製—』「濃飛育児院」p.1を参照。

『社会事業の先覚者 五十嵐喜廣翁』（1984、社会福祉法人思恩会）では、昭和四（一九二九）年「五月一日、山形県西田川郡西郷村七窪に分院を創設し、昭和八年八月十日、七窪分院を独立せしめ、七窪思恩園と改称す。」と表記している。

『み恵みに生かされて 創立 110 年の歩み』（2005、道下淳）では、5 月「山形支部を設立。（山形県西田川郡西郷村七窪）園長兼務。S5.9 防貧事業として、メロン研究会を組織し、会長に就任。S8.8 七窪分院を分離・独立。七窪思恩園に改称。」と表記している。

本節にある日本育児院とは、明治 39 年に濃飛育児院からさらに名称を変更したものである。その分院ということで、日本育児院七窪分院となっている。

ここでも、『五十嵐喜廣の生涯』の文献から考察する。「第八部 沿革史粗描」の「第三節 郷里七窪に思恩園と砂丘地開発」より、「・・・昭和五年二月、郷里湯野浜の海岸に分院を設置せんとする計画を発表したところ、郷党は双手を挙げて賛意を表し、財団法人七窪分院創立後援会を組織して顧問、創立委員、評議員を地方有力者に委嘱して活動を開始し、専ら庄内地方に寄付を仰いだが、之に対し、鶴岡市、東田川郡、飽海郡の各小学校児童と中等学校の生徒職員は零細な浄財を寄付して、この事業の完成を援けた。」⁸とある。このことから、1929（昭和 5）年 2 月に山形県湯の浜に分院を創設しようとしていたことがわかる。そして、年表に倣うとすれば、その 3 ヶ月後に分院創設が実現したことが言えるであろう。

第 4 節．五十嵐喜廣逝去年を妻五十嵐よしの回顧録より分析する

1944（昭和 19）年（当時、五十嵐喜廣 72 歳にあたる。）

七月十三日、院長五十嵐喜廣山形県七窪で執務中脳溢血で昇天、満七十二才。

八月十三日、妻よし二代目園長となる。

思恩会ホームページによると、1944（昭和 19）年「七窪思恩園にて執務中、五十嵐喜廣急逝」と表記している。

『社会事業界の偉才 五十嵐喜廣翁一小傳一』（1956、思恩会）では、（3）賞罰の欄に、昭和十九年七月十三日「逝去。氏は熱烈なる愛国者にして基督教信者であり、一生を社会事業に献げられた孤児達の慈父である。」と表記している。

「岐阜県における社会事業の歴史—岐阜県における最古育児施設飛騨育児院と創立者五十嵐喜広」（1975、浅倉恵一）では、昭和 19 年 7 月「院長五十嵐喜広七窪思恩園にて死去」と表記している。

『社会事業の先覚者 五十嵐喜廣翁』（1984、社会福祉法人思恩会）では、昭和十九（一九四四）年「七月十三日、七窪思恩園に於て急逝。」と表記している。

『み恵みに生かされて 創立 110 年の歩み』（2005、道下淳）では、昭和 19 年 7 月 13 日「五十嵐喜廣、七窪思恩園にて執務中に脳溢血による召天 72 歳。」、8 月 13 日「五十嵐よし夫人（園母）が 2 代目理事長兼園長に就任」と表記している。

五十嵐喜廣の逝去年を証明する資料として、『創立六十周年記念誌』にある「式

⁸不破義信（1981）『孤児の父 五十嵐喜広の生涯』、共和印刷株式会社 p.162 を参照。

辞」には、日本児童育成園二代目園長であり、五十嵐喜廣の妻にあたる、五十嵐よしが次のように述べている。「私が知人の平田平三牧師の御世話によつて婦人伝道所をやめて五十嵐喜広に嫁して来たのは大正元年の暮でしたので私と園との関係も丁度四十三年になるわけです。其の間園母として夫を援け、昭和十九年七月に夫が昇天した後は二代目園長として園と共に今日まで歩いて参りました。」⁹。この文章には、五十嵐喜廣が昭和十九年七月に逝去したことがわかる。したがって、上記の文献に記したように、五十嵐喜廣が逝去したのは1944(昭和19)年7月と合致する。

終章．本研究のまとめと今後の課題

—五十嵐喜廣の生涯を年表より紹介して—

本研究のまとめ

本研究では、日本における二箇所の児童養護施設、日本児童育成園と七窪思恩園の創設者である五十嵐喜廣の生涯の一部を考察してきた。一次資料をはじめとして、関連する文献資料から、五十嵐の出生年月日及び逝去年、日本児童育成園及び七窪思恩園の創設年・創設背景を明らかにした。

しかし、五十嵐喜廣の生涯には、本文には収まりきれない要素が存在することも確かである。五十嵐に関するそのキーワードとして、キリスト教、日本児童育成園の歴史、日本国内・世界各地の分院の動向、五十嵐喜廣と四人の妻、三度の海外研修、庄内砂丘地開発、提案・提唱したもの、五十嵐喜廣に関する著書・機関誌、就任・推薦された役名、表彰されたもの、の10項目を挙げておく。

今後の課題

今後の研究への重要課題は、五十嵐喜廣に関する一次資料の発掘である。その一次資料とは、五十嵐喜廣本人が著した本、機関紙等が含まれる。本研究では、五十嵐喜廣の出生年、七窪思恩園（日本育児院七窪分院）の創設年における一次資料を紹介できなかった。これらの年代を証明することを始め、今後は一次資料の発掘調査方法もまた検討していかなければならない。

最後に、日本の社会福祉・社会事業実践を築いてきた先人達の努力や苦労は、戦前・戦後の壁を越えて継承していかなければならないものであろう。そのためにも、社会福祉の歴史研究において、社会福祉・社会事業実践者の歴史分野のさらなる開拓の一助となれるような探究心を持ち続けていきたい。

⁹五十嵐よし（1955）『創立六十周年 記念誌』、日本児童育成園 pp.1～pp.2 を参照。

引用文献一覧

1) 思恩会ホームページ

URL→<http://www10.ocn.ne.jp/~sionkai/sousishasokuseki.html>

- 2) 五十嵐よし (1955) 『創立六十周年 記念誌』日本児童育成園
- 3) 思恩会 (1956) 『社会事業界の偉才 五十嵐喜廣翁一小傳一』思恩会
- 4) 浅倉恵一 (1975) 「岐阜県における社会事業の歴史—岐阜県における最古育児施設 飛騨育児院と創立者五十嵐喜広」『中部女子短期大学紀要第六号』
- 5) 不破義信 (1981) 『孤児の父 五十嵐喜広の生涯』共和印刷株式会社
- 6) 社会福祉法人思恩会編 (1984) 『社会事業の先覚者 五十嵐喜廣翁』株式会社荘内日報社
- 7) 道下淳 (2005) 『み恵みに生かされて 創立 110 年の歩み』日本児童育成園
(以上が、年表比較に使用した文献、資料である。)
- 8) 日本児童育成園 (1985) 『創立 90 周年を記念して—「濃飛育児院(明治 34 年)の複製—』
- 9) 田代国次郎・菊池正治 (1987) 『日本社会福祉人物史 上』相川書房
pp. 94-pp. 97 に、梅村貞子によって五十嵐喜廣のことが取り上げられている。
- 10) 金子光一 (2007) 『社会福祉のあゆみ』有斐閣

参考文献一覧

1) 思恩会ホームページ

URL→<http://www10.ocn.ne.jp/~sionkai/sousishasokuseki.html>

- 2) 日本児童育成園 (1985) 『創立 90 周年を記念して：「濃飛育児院(明治 34 年)の複製』
- 3) 五十嵐よし (1955) 『創立六十周年 記念誌』日本児童育成園
- 4) 思恩会 (1956) 『社会事業界の偉才 五十嵐喜廣翁一小傳一』思恩会
- 5) 浅倉恵一 (1975) 「岐阜県における社会事業の歴史—岐阜県における最古育児施設 飛騨育児院と創立者五十嵐喜広」『中部女子短期大学紀要第六号』
- 6) 不破義信 (1981) 『孤児の父 五十嵐喜広の生涯』共和印刷株式会社
- 7) 社会福祉法人思恩会編 (1984) 『社会事業の先覚者 五十嵐喜廣翁』荘内日報社
- 8) 道下淳 (2005) 『み恵みに生かされて 創立 110 年の歩み』日本児童育成園
- 9) 伊東多三郎監修 (1975) 『鶴岡市史 下巻』、鶴岡市役所
- 10) 鶴岡百年の人物刊行会編 (1972) 『鶴岡百年の人物 上巻』鶴岡百年の人物刊行会
- 11) 田代国次郎・菊池正治 (1989) 『社会福祉人物史(上)』相川書房 pp. 94-pp. 97
(梅村貞子)
- 12) 金子光一 (2007) 『社会福祉のあゆみ』有斐閣
- 13) 吉田久一 (1990) 『吉田久一著作集 3 改訂増補版現代社会事業史研究』川島書店